

葛西 新八郎（かさい・しんぱちろう）

1、プロフィール

小説・戯曲家。早稲田大学在学中、白樺派の影響を受け、戯曲集『自分の本』（大正9年12月）を刊行した。「黎明」・「氷柱」に小説、戯曲等を発表し、文学活動をした。

<生没>

1897(明治30)年 ～ 1926(大正15)年

<代表作>

戯曲集『自分の本』

<青森との関わり>

弘前市に生まれる。木造町、弘前市に居住し、県内の雑誌に作品を発表し、創作活動をした。

2、作家解説

小説・戯曲家。明治30年弘前市和徳町千葉太の二男として生まれる。和徳小学校を卒業、明治44年県立弘前中学校に入学する。中学校在学中、文学書・哲学書を濫読し、「すみそん」の筆名でキルケゴールについて「弘前新聞」に感想を連載した。大正5年卒業、早稲田大学哲学科に入学。同郷の成田泰次郎と武者小路実篤を訪問し、白樺派に強い影響を受け、自らも白樺派を任ずるようになった。そのことが契機になり木造町の素封家である葛西家に養子にやられることになり、葛西家の養女であるみね子と大正6年11月結婚をする。数年、文学への悶々とした思いを抱き過ごす。大正9年夏、大金を持ち、突然出奔、上京する。大尽遊びの結果、旬日にして大金を使いいきり失意のまま、帰郷した。これ以後、『自分の本』の執筆にかかる。同年「黎明」10月号に翻訳小説「才能」(アントンチェホフ)を掲載。12月1日、青森市の歌人結社である黎明詩社から『自分の本』を刊行する。「黎明」12月号で新著紹介される。

大正 11 年、「黎明」新年号に「ドストエフスキイ年代表」、4・5月号に小説「ある小説の挿話」、同 12 年、「黎明」1月号に脚本「つまらぬ一場」を発表。その後、養家を出て、実家に帰る。弘前駅の東側の梨畑の小屋を「浄信庵」と名づけ、居住した。雑誌「氷柱」を発行したが、同 14 年 11 月、病を得て廃刊。同 15 年、30 歳で死去。

3、資料紹介

○『自分の本』

図書

1920(大正9)年 12 月

182mm×121mm

戯曲集。発行所黎明詩社。内容は序・「木村重成」・「夜明け」・後書からなる。序で「『自分の本』は自分の耕作地だ。自分は若い農夫だ。(略)自分は満身に、ぐっと力を入れて、種を播いた(後略)」と記している。